

【2012 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 総括と今後の課題】

8 週間コース参加学生	ルンド大学(スウェーデン)	14 名
4 週間コース参加学生	木浦大学(韓国)	3 名
	計	17 名

岐阜大学サマースクール(受入、以下略)は、今年度で四半世紀、25 回目を迎えた。定員 25 名で募集したところ、上記のように 17 名の申込があった。昨年度、福島第一原発の事故の影響を懸念して参加者を派遣しなかったソウル科学技術大学から、今年も派遣がなく、残念ながらルンド大学、木浦大学2校からのみの参加となった。

今年度 8 週間コースは、6 月 4 日(月)から開始し、6 日(水)に開講式およびガイダンスを行なった。日本語授業等の実際のプログラムは、翌 7 日(木)から開始した。4 週間コースは、6 月 28 日(水)にガイダンスをし、コースをスタートした。

プログラムには、以下の内容が盛り込まれた。後掲の日程表を参照願いたい。

1. 日本語授業:毎週月～木曜、1 日 2 コマ(8:50～10:20, 10:30～12:00)
2. 日本事情／文化講義・実演:全 3 回実施(能実演 6/20、狂言実演 7/4、相撲講義 7/17)
3. エクスカーション:美濃 6/14、土岐 6/25、相撲 7/19
4. 旅行:上高地・松本・馬籠宿 7/5～6、郡上 7/13～16

これらの他に、ガイダンスや修了式なども行なった。以下、今年度の総括と次回以降の課題等を、学生からのフィードバックを参照しながら述べる。

学生フィードバックは、筆記アンケート(7/23 配付、7/25 回収)とまとめの会(反省会、7/25 実施)での口頭アンケートから得た。筆記アンケートは、過去の年度との比較のため、質問項目を大きく変えないようにしている。それに対して、まとめの会の口頭アンケートで学生に尋ねるのは、年度ごとに質問内容が異なる。筆記アンケート集計結果は別に示す。

I 日本語授業

昨年度のサマースクールでは、日本語授業に対して数々の指摘がなされた。そのため、今年度は以下の変更を加えた。

- ① 教科書:昨年度の教科書『J BRIDGE』(凡人社)から『中級までに学ぶ日本語』(研究社)に変更。補助的に『日本を話そう』(ジャパンタイムズ)も使用。
- ② スケジュール:曜日ごとに学ぶ内容、取り上げる技能を固定(月火:文法・読解、水:聴解・作文、木:日本事情)。
- ③ 担当教員:日本語クラスは A, B の 2 クラスに分かれるが、それぞれを担当する教員を固定(留学生センター専任教員 2 名と非常勤講師 5 名、計 7 名が担当。昨年度までは全教員が A, B 両クラスを教えたが、昨年度、教員の数が多すぎるという指摘があったため)。

これら 3 点についての今年度の評価は、概ね良かった(まとめの会アンケートにて、肯定的な回答が、①教科書については 16 名中 13 名(以下同様に人数を示す)、②スケジュールについては 15 名)。③教員の数についても苦情はなかった。

サマースクールの日本語授業での宿題の扱いは、例年頭を悩ませている。宿題が多いと、せっかく日本に来ているのに机の前で勉強するのは嫌だといった意見があったり、日本人にインタビューをする宿題では、対象者が限られて思うようなインタビューができなかったりする。今年度は、特に宿題を課さなかったのだが、それについて、宿題があったほうが良いと答えた学生(9名)が、なくて良いと答えた学生(6名)を上回った。これは興味深い結果である。年度によって学生の資質が全く異なるので、必ずしも次回の学生が宿題を希望するわけではないが、今年度の学生については、授業を受ける態度からも、学習意欲の高さがうかがえたので、宿題が効果的だったかもしれない。

今年度の日本語授業については、大きな問題は見当たらず、次年度は微調整をしつつ基本的に今年度を踏襲してよいのではないかと考えている。

Ⅱ 日本事情／文化講義実演

今年度は3回実施した。ただ講師の話を受身の講義ではなく、実際に参加できるワークショップ形式が好評であることは、過去の経験から明らかであるので、ワークショップ形式(能、狂言)を2回、見学の予習となるもの(相撲講義)を1回行なった。また、純粋な講義ではないが、ホームステイを含む郡上プログラムの前に、事前連絡を兼ねてホームステイのマナーと注意事項を1講義分の時間を取って行なった。

能のワークショップは、昨年度より、留学生センター行事として、広く学内の留学生・日本人学生、大学教職員に公開している。今年度も、観世流シテ方味方團先生・同田茂井廣道先生をお招きして、「留学生と日本人学生のための能楽ワークショップ～見て、聞いて、体験して～」として開催した(平成24年度岐阜大学活性化経費(教育)採択事業)。日本人学生をなかなか呼び込めないことを反省しているが、サマースクール参加学生にとっては、実際に使われる面、楽器、装束を目の前にした、例年同様通り楽しく有意義な講義と実演となった。

狂言の実演(ワークショップ)は、大蔵流狂言方山口耕道先生・同茂山良暢先生にお越しいただき、サマースクール参加学生を主とした留学生対象の講義と実演をしていただいた。相手との距離を近づけること、他人の体に触れることを通して、演じるとはどういうことかを感じさせる活動では、学生たちは真剣に、かつ楽しげに参加していた。狂言のワークショップは、会場と日程の関係で、ほぼサマースクール参加学生に限られた行事になっているが、こちらもそこに留めておくには惜しい内容で、能のワークショップと同様、広く開放したものにはできないかと思う。講師の先生方からも、能と狂言をひとまとめにしたワークショップにしてはどうかのご提案もいただいている。次年度に向けて、じっくり考えてみたい。

Ⅲ エクスカーション・旅行

岐阜という地にある岐阜大学が提供できるものを、という「地域密着型志向」を、今年度も踏襲した。美濃、土岐、郡上のプログラムは、不動の人気を得ていると実感する。それぞれの内容は以下の通りである。

- ・ 美濃エクスカーション:午後からの日帰りプログラムで、浴衣の着付けと和太鼓体験を実施。
- ・ 土岐エクスカーション:午後からの日帰りプログラムで、陶芸体験(轆轤及び絵付け)を実施。
- ・ 郡上プログラム:郡上八幡国際友好協会(GIFA)、郡上市役所はじめ郡上の皆様のご協力を得て、3泊4日で実施。文化体験(書道、郡上踊り、剣道、茶道等)とホームステイ。

これらの他に、大相撲名古屋場所観戦と一泊旅行がある。過去2回開催が危ぶまれた名古屋場所だが、今

回はその懸念もなく、安心してスケジュールに組み込むことができた。

一泊旅行については、昨年度は上高地・高山・白川郷を回ったが、検討を経て今回は訪問先を変更した。今年度は、この一泊旅行と郡上プログラムについて変更・修正を加えたので、以下それらについて述べる。

① 一泊旅行

本プログラム内の一泊旅行は、以前は京都が目的地であったが、岐阜という地域性を生かしたものにしたいという思いと、京都には自分で行けるという学生が少なからず発生してきたことから、2009年度からは岐阜県内もしくは近県を訪問先にしている。昨年度までは、上高地・高山・白川郷を回っていた(宿泊は高山)。しかし、郡上プログラムの際に、ホストファミリーが高山や白川郷に受入学生を連れて行くというケースが少なからずあることが、徐々に明らかになってきた。学生サイドから、同じところに2回行くのはもったいないという意見があり、郡上のホストファミリーからも、せっかく連れて行ったら、もうここには来たことがあるといわれてがっかりしたという意見があった。そのため、今回はあえて県内の高山と白川郷を外すことにした。

今年度は、上高地(ここは学生に評判が良く、学生個人で行ったりホストファミリーが連れて行ったりした前例は皆無)・松本・馬籠宿を回るプランにした(宿泊は白樺湖)。日本の自然と歴史の両方を感じられる旅程で、学生の評価も高かった(とても良かった9名、良かった7名、普通1名)。ホストファミリーと白川郷へ行った学生が、「白川郷を見られなかった学生は残念だ」というコメントを残しているのを見ると、白川郷に訪問する機会が得られなかった学生がいることに若干の迷いが生じる。しかし、全員に100%の満足を与えることは、現実として不可能である。郡上のホストファミリーからもこの変更は適当との意見があったことを考えると、少なくとも数回は、今年度同様の旅程で実施してみる必要があると考える。

② 郡上プログラム

昨年度のサマースクールでの学生の反応が、「疲れた」「忙しすぎた」一色に染まってしまったことを反省し、今回は、郡上八幡国際友好協会(GIFA)の方々と、事前の打合せを綿密にし、対応を考えた。具体的には、初日のスタートを遅らせることと、盛り込む文化体験を減らすことにした。

昨年度まで、初日は8:30に宿舎を出発していたが、それを約1時間遅らせることにした。文化体験は、会場までの移動距離が長いものを割愛した。そして、夕刻に自由時間を長めに取りすることにし、学生が一息つけるようにした。その結果、今年度の学生のうち、郡上プログラムが疲れた・忙しすぎたと回答した学生は、3名に激減した。効果的な修正ができたと思う。

今年度は事前打合せをとにかく綿密にし、情報のやり取りを多くしたいと考えた。顔を合わせての打合せはもちろん、メールでの打合せも数多く行なった。ホストファミリーの方からの、担当する学生についての情報をもっと知りたいという要望を受け、趣味や学生の希望などを書かせるホームステイ事前アンケートなども行ってみた。プログラムを終えて感じることは、やはり時間をかけた丁寧な準備は、よい結果をもたらすということである。この当たり前のことを強く実感した。この教訓を次回以降も生かしていく所存である。GIFAの皆様には、打合せで多大の時間と労力を割いていただくことになってしまったが、今後ご理解をいただければ願っている。

IV その他

プログラム内容そのものについてではないが、昨年度に引き続き、参加学生から多くのコメントが寄せられた点を以下に記す。

① 宿舎のインターネット

昨年度から宿舎でインターネットを使えるよう、無線 LAN を整えたが、昨年度に引き続き、今年度も宿舎のネットが遅い、不安定だという意見が続出した。多大な経費がかかる宿舎設備の改修は、不可能であるし不要でもあると考えている(一昨年度までまったくネットが使えない状況だったことを考えると、現状は大いなる改善である)。できることとできないことの差異ははっきりさせておく。

遅いのであれば宿舎のネットはいらないかと問うと、「とても必要」5名、「必要」3名、「まあ必要」4名で、必要と考える回答が16名中12名からあった。また、宿舎のネットを使ったと回答した学生は14名に上った。不自由は伴うが、あったほうが助かるというのが学生の見解であると理解した。

昨年度は、ネットができる部屋に閉じこもって他の学生や日本人学生チューターとの交流を拒む学生の存在が問題になったが、今年度は皆が集まる食堂にルーターを設置したため、そのような問題はなかった。食堂に設置するという案は正解であった。

② スクールバス

通学時の学生の安全を考えて、2008年度から宿舎から大学キャンパスまで、スクールバスを運行している(宿舎とキャンパス間の距離は、約8km)。2008年度運行開始時の方針は、大学が学生の安全に配慮するということであった。大学としてはスクールバスを運行することでその責任を果たし、それに乗るか乗らないかは学生が個人の責任で判断すると考えている。しかし、この方針が一貫されず、サマースクール参加学生は全員スクールバスで登下校しなければならぬという指示のずれが生じている。当然のことながら、学生たちはこの指示には不満であり、最も多くの不満が集中した。方針の明確化が必要である。

V 学生の事故と大学の対応

プログラム実施中は、大きな怪我や病気がなく、非常に安定したプログラム運営ができていたのだが、プログラム最終日に学生1名が交通事故に遭い、その対応がプログラム終了後も長引いてしまった。交通事故に遭ったこと自体は不幸で同情すべきことであったが、その後の対応で、岐阜大学およびその学生の所属大学が必要以上に巻き込まれ、振り回される事態となった。このような事故は、基本的には、その当事者(加害者、被害者、保険会社)で対応すべきで、大学がどこまで関わるべきなのか、判断が難しい。今回の場合、その学生が成人であったことや、プログラム終了後の時期にまで交渉が及んだことを考えると、もっと個人で責任を持って対応してもらいたかったと思う。

サマースクールに限らず学生を受け入れる場合、怪我や病気の可能性をゼロにすることは不可能である。もし何かが起きた場合どうするのか、どこまで大学として関わるのか、冷静に考える必要があると再度強く認識した。

今年度のサマースクール全般についてのアンケート結果は、「とても良かった」12名、「良かった」4名、「普通」1名であった。「とても良かった」のうち2名は、こちらが準備したスケールが最高点「5」であったところ、独自に「6」の数値をつけて高い評価をしており、プログラム提供側としては嬉しく感じた。今年度は、17名という少ない人数であったことが残念だったが、人数が少ないことで目が行き届いた面があったのかもしれない。

今年度のサマースクールは、独立行政法人日本学生支援機構の「平成24年度留学生交流支援制度(シヨ

ートステイ)」に採択され、各学生に奨学金が支給された。この奨学金は間違いなく学生たちの日本滞在中の経済的負担を軽減したが、皮肉なことに負の側面も生じさせた。この奨学金が支給されることが1つの契機となり、本プログラムの参加費が値上げされたのである。参加費値上げには他の理由もあるだろうが、奨学金のあり方を考えさせられた。

今年度のサマースクールも多くの方々のご好意とご協力をいただき、無事全日程を終えることができました。エクスカッションでお世話になった郡上、美濃、土岐の皆様にはお礼を申し上げますと同時に、今後も変わらぬご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。

サマースクール参加学生に本物を体験させるために、実演をお願いしている能の味方團先生・田茂井廣道先生、狂言の山口耕道先生・茂山良暢先生には、今年度も快くお引き受けいただきました。どうもありがとうございました。

サマースクール参加学生が居住する学外研(学外合宿研修施設)では、管理人岩松明美さんにお心配りをいただき、10名の宿舎チューターズ、3名のサポーターズには友人として、相談相手として、模範として、活躍してもらいました。ありがとうございました。来年度のサマースクールの無事の実施を祈念して稿を終えたいと思います。(文責:サマースクール受入コーディネーター土谷桃子)

2012 年度 岐阜大学サマースクール(受入) 日程表

	行事	日本語クラス		行事	日本語クラス
6/4 M	8週間コーススタート		7/1 S		
5 Tu			2 M		◎
6 W	8週間コース開講式・ ガイダンス・歓迎茶話会		3 Tu		◎
7 Th	日本語授業開始	◎	4 W	狂言実演	◎
8 F			5 Th	1泊旅行(~6)	
9 Sa			6 F		
10 S			7 Sa		
11 M		◎	8 S		
12 Tu		◎	9 M		◎
13 W		◎	10 Tu		◎
14 Th	美濃エクスカージョン	◎	11 W		◎
15 F			12 Th	ホームステイ連絡/注意 事項/マナー講義	◎
16 Sa			13 F	郡上プログラム(~16)	
17 S			14 Sa		
18 M		◎	15 S		
19 Tu		◎	16 M	海の日	
20 W	能楽ワークショップ	◎	17 Tu	相撲講義	◎
21 Th		◎	18 W		◎
22 F			19 Th	相撲観戦	◎
23 Sa			20 F		
24 S			21 Sa		
25 M	土岐エクスカージョン	◎	22 S		
26 Tu		◎	23 M		◎
27 W		◎	24 Tu	日本語授業最終	◎
28 Th	4週間コースガイダンス	◎	25 W	まとめの会・修了式・ 歓送会	
29 F			26 Th	宿舎大掃除	
30 Sa	4週間コース学生 歓迎パーティー				